



第5号掘立柱建物跡 確認 東→



第5号掘立柱建物跡 完掘 南→



第6号掘立柱建物跡 完掘 北→



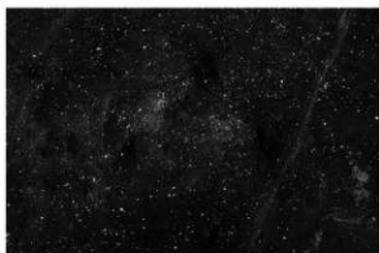
第6号掘立柱建物跡 確認 北→



第7号掘立柱建物跡 完掘 東→



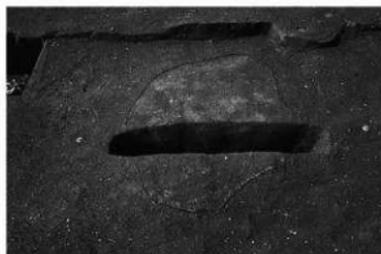
第7号掘立柱建物跡 完掘 北→



第1号焼土遺構 確認 北東→



第1号焼土遺構 土層 東→



第2号烧土遺構 東→



第2号烧土遺構 土層 東→



第3号烧土遺構 東→



第4号烧土遺構 南東→



第1号道路跡 確認 南→



第1号道路跡 土層 北→



第1号集石遺構 下層確認 東→



第1号集石遺構 下層確認 南→



第1号石器埋納遺構 確認 北→



第1号石器埋納遺構 土層 西→

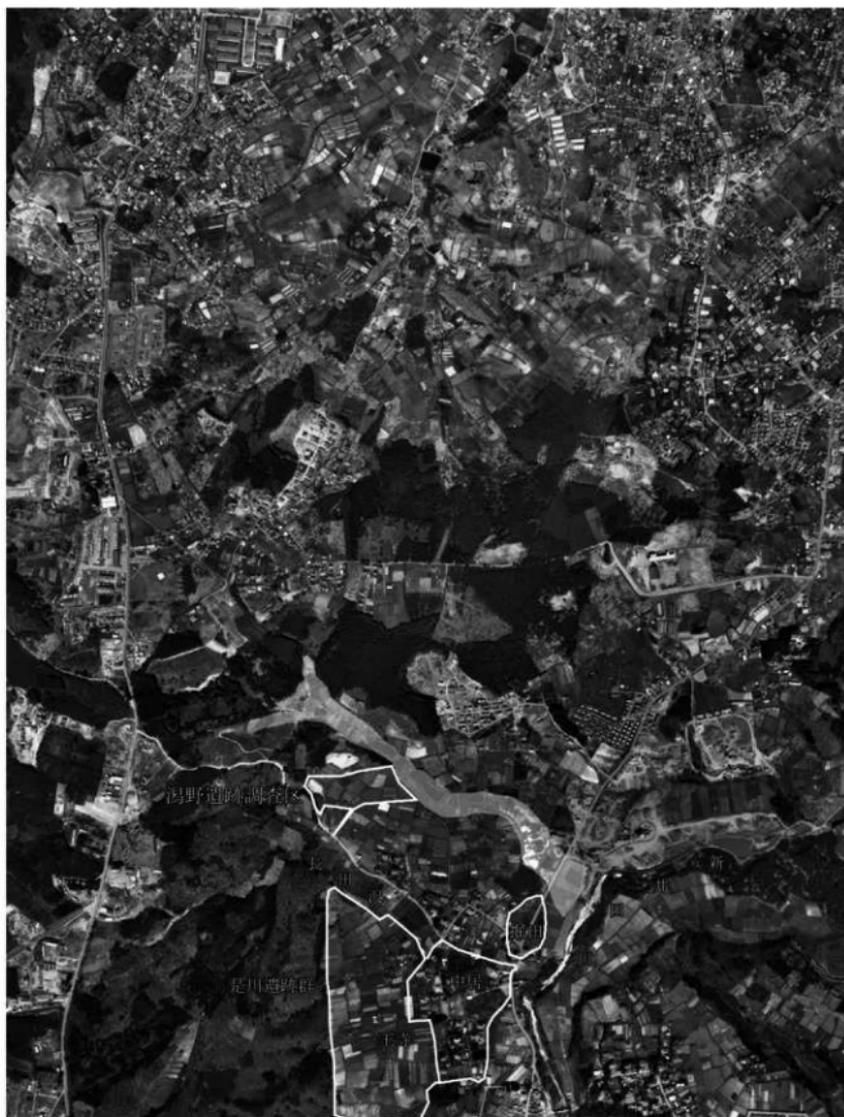


第1号石器埋納遺構 土層アップ



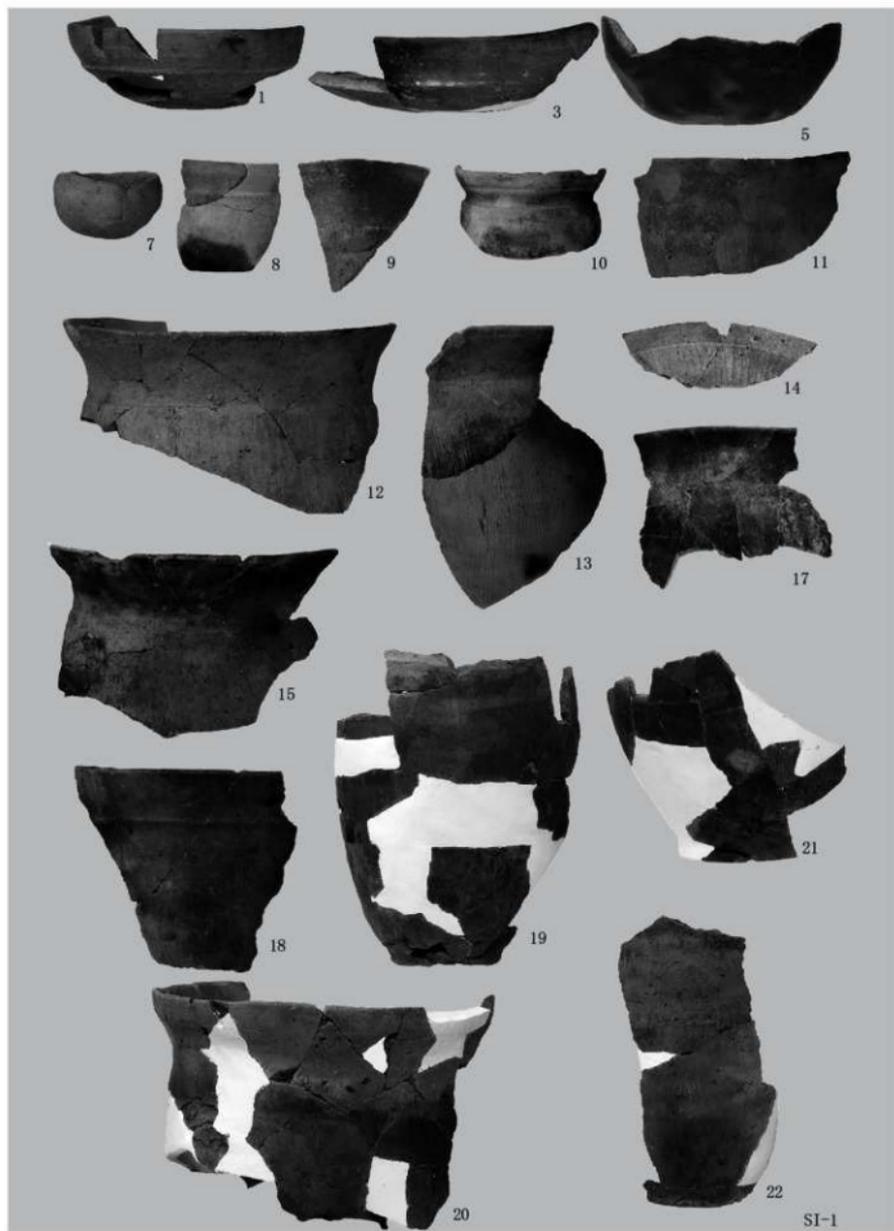
第2号道路跡 土層 南→

図版57



遺跡周辺の航空写真

図版58



SI-1

图版59

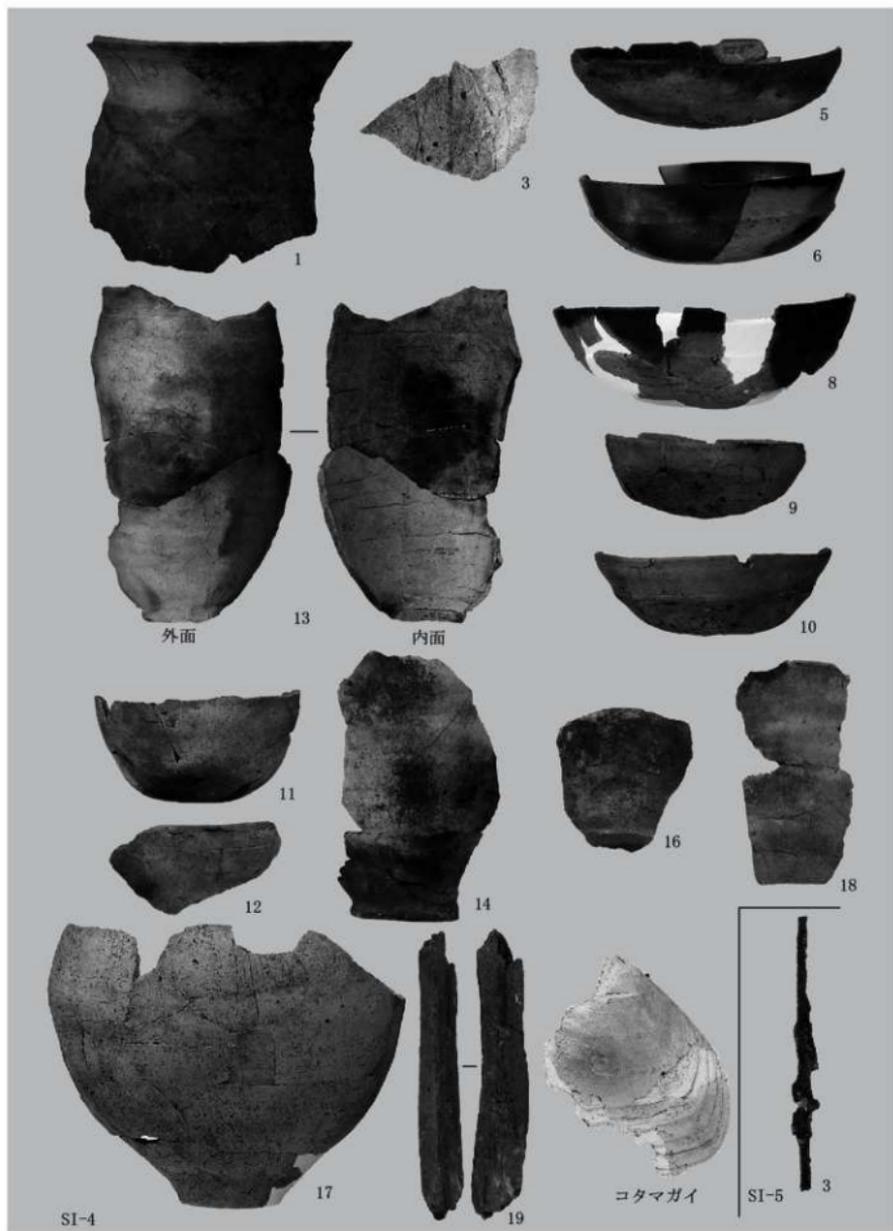


图版60



SI-3

图版61



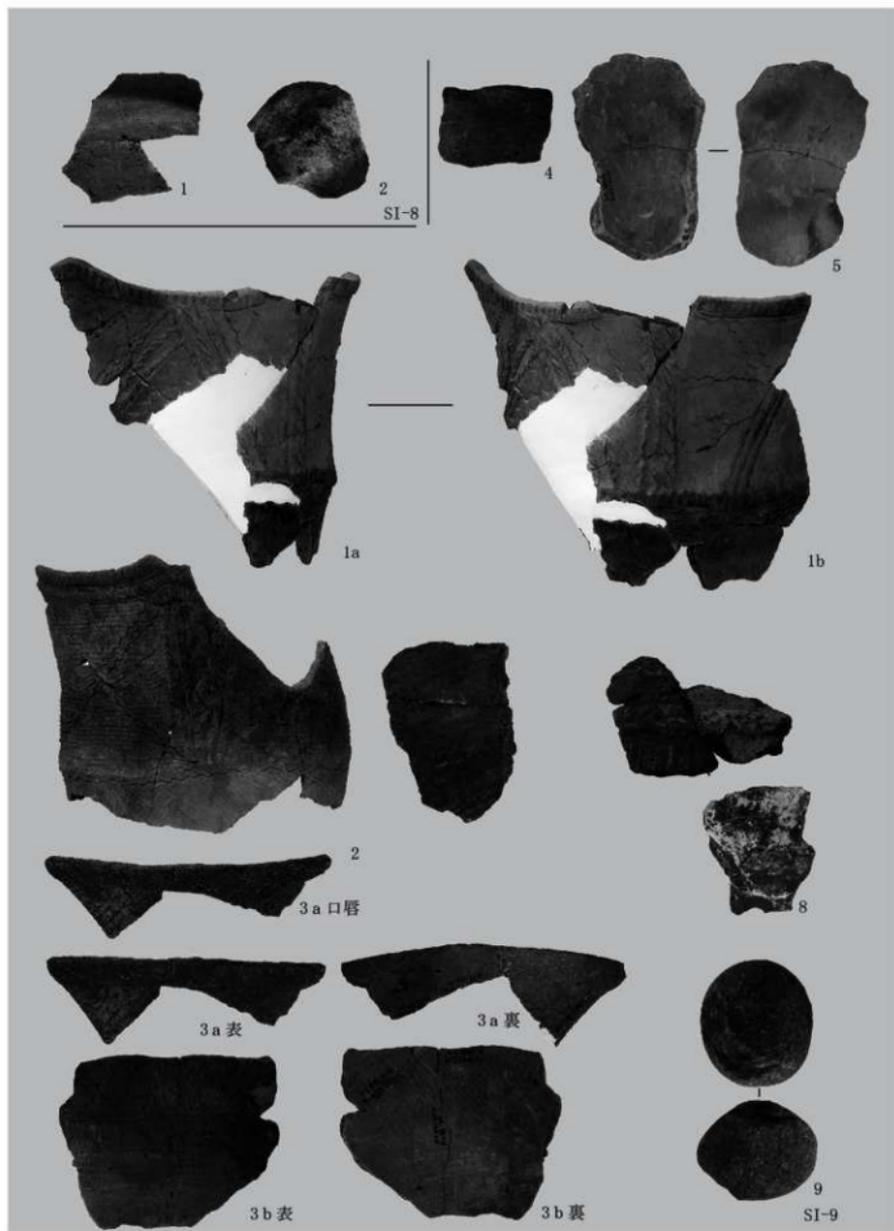
図版62



图版63



图版64



図版65



图版66



図版67



图版68



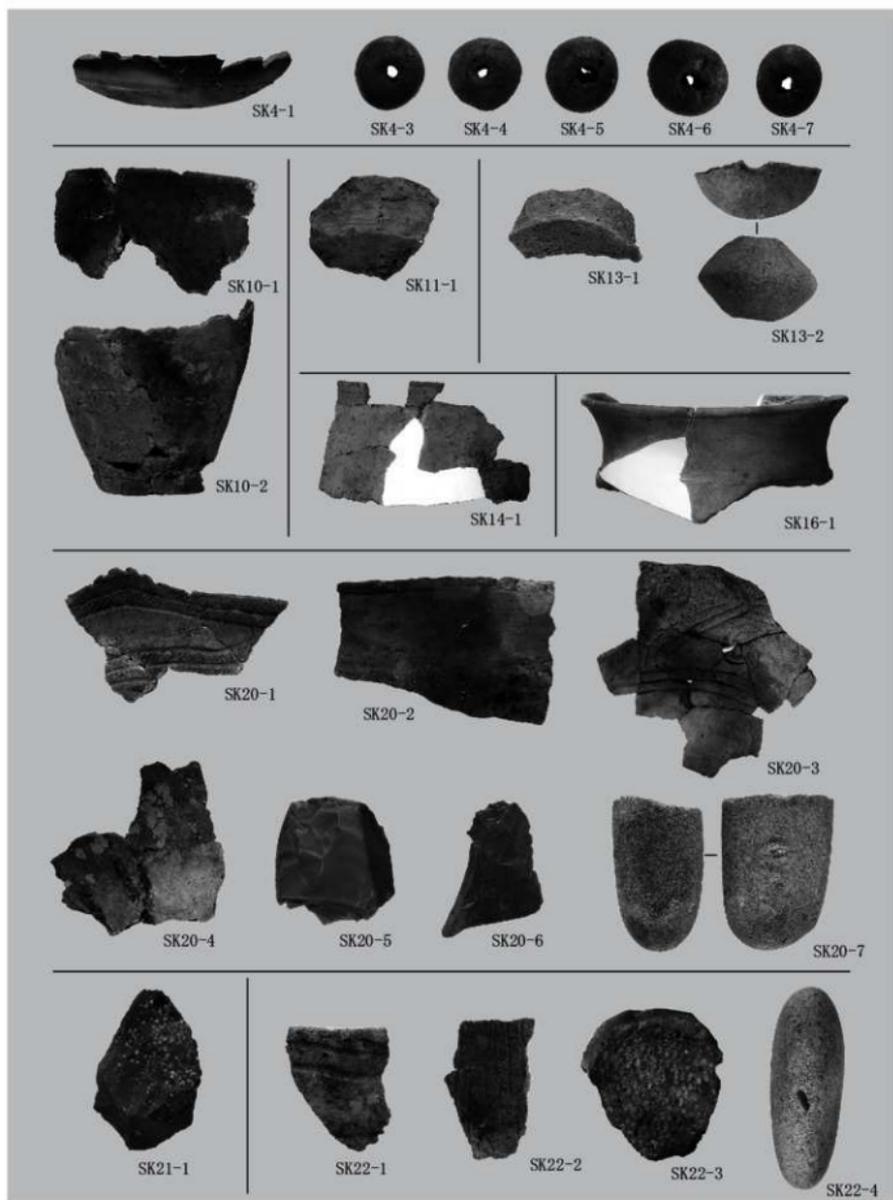
図版69



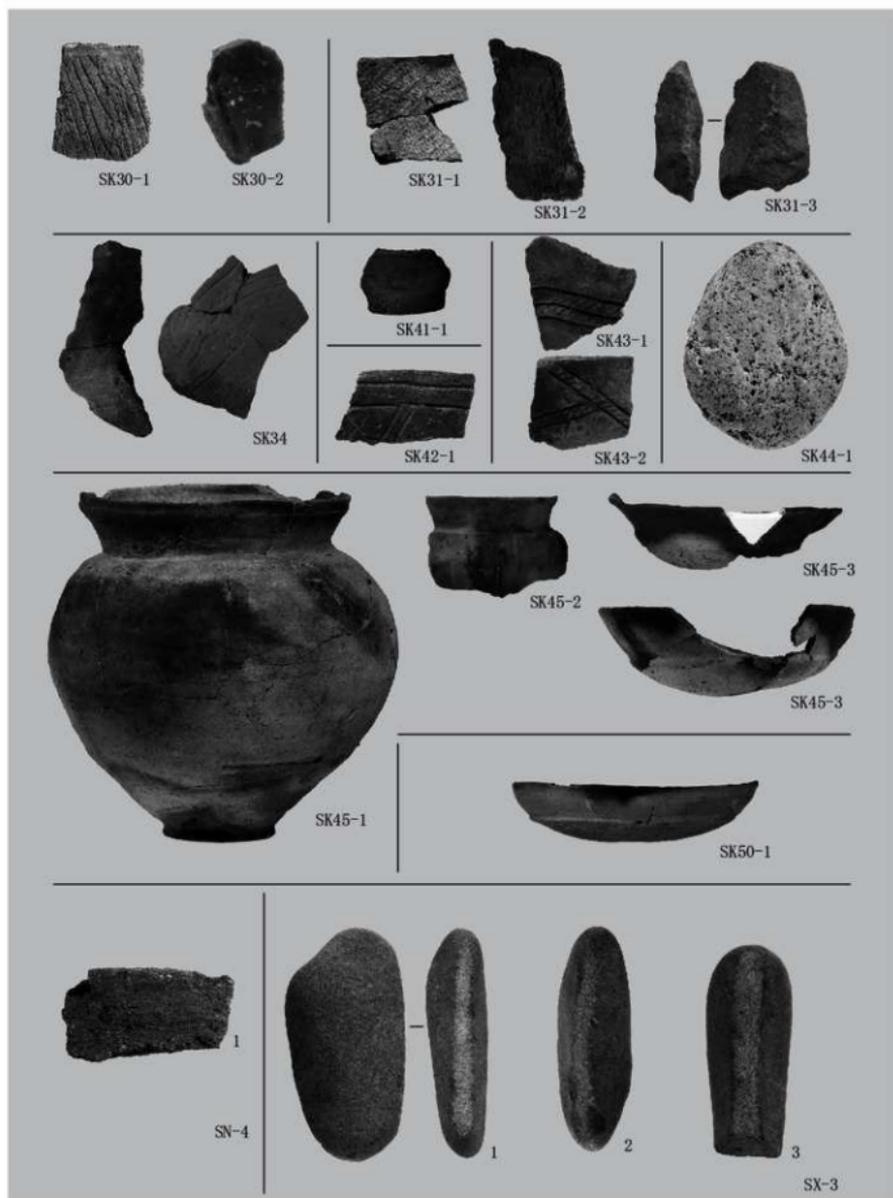
图版70



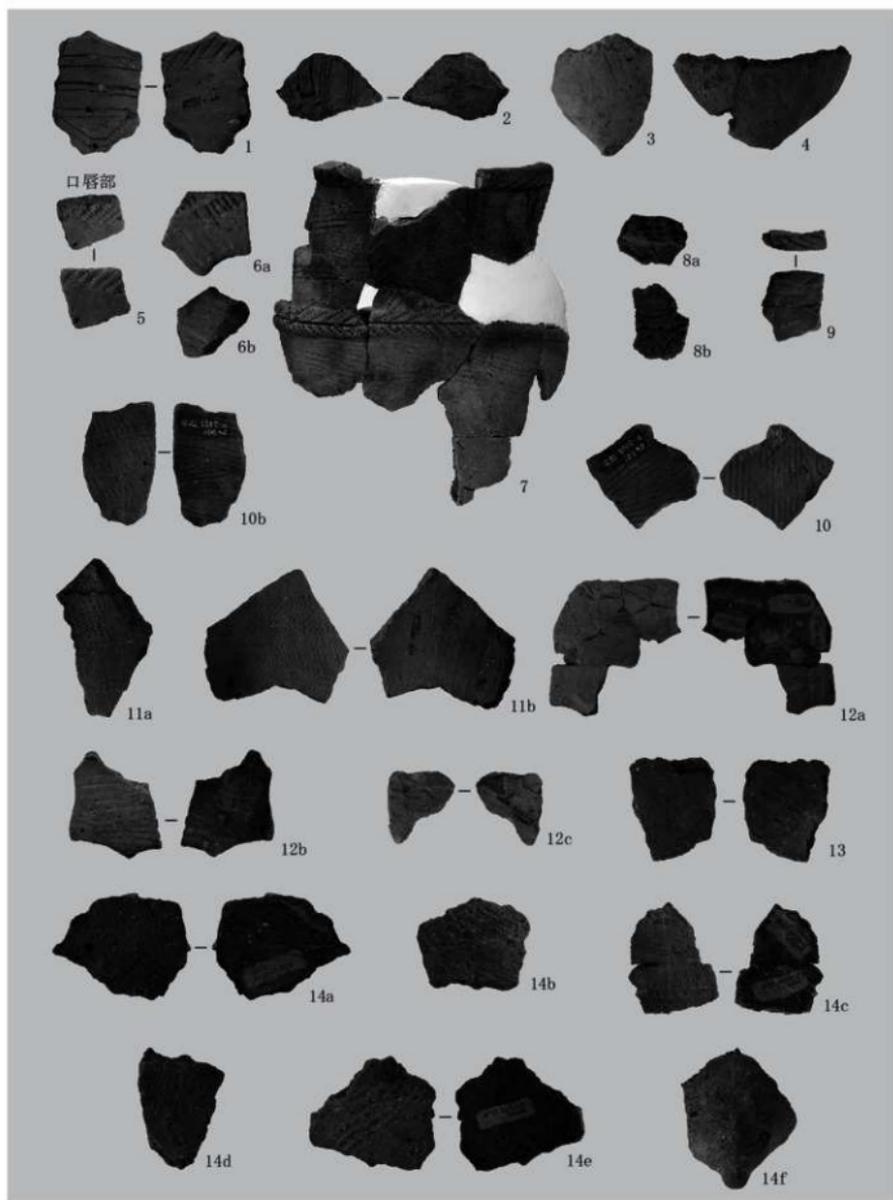
图版71



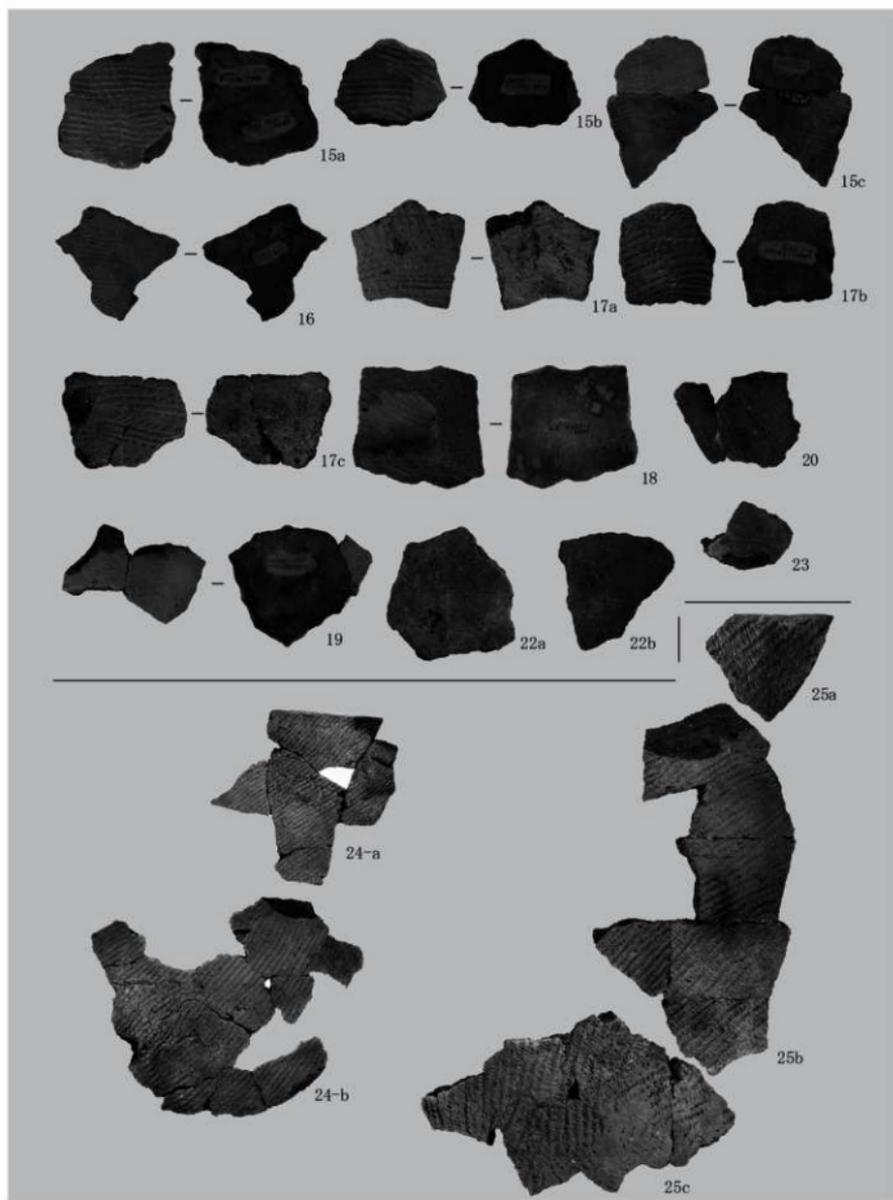
图版72



图版73



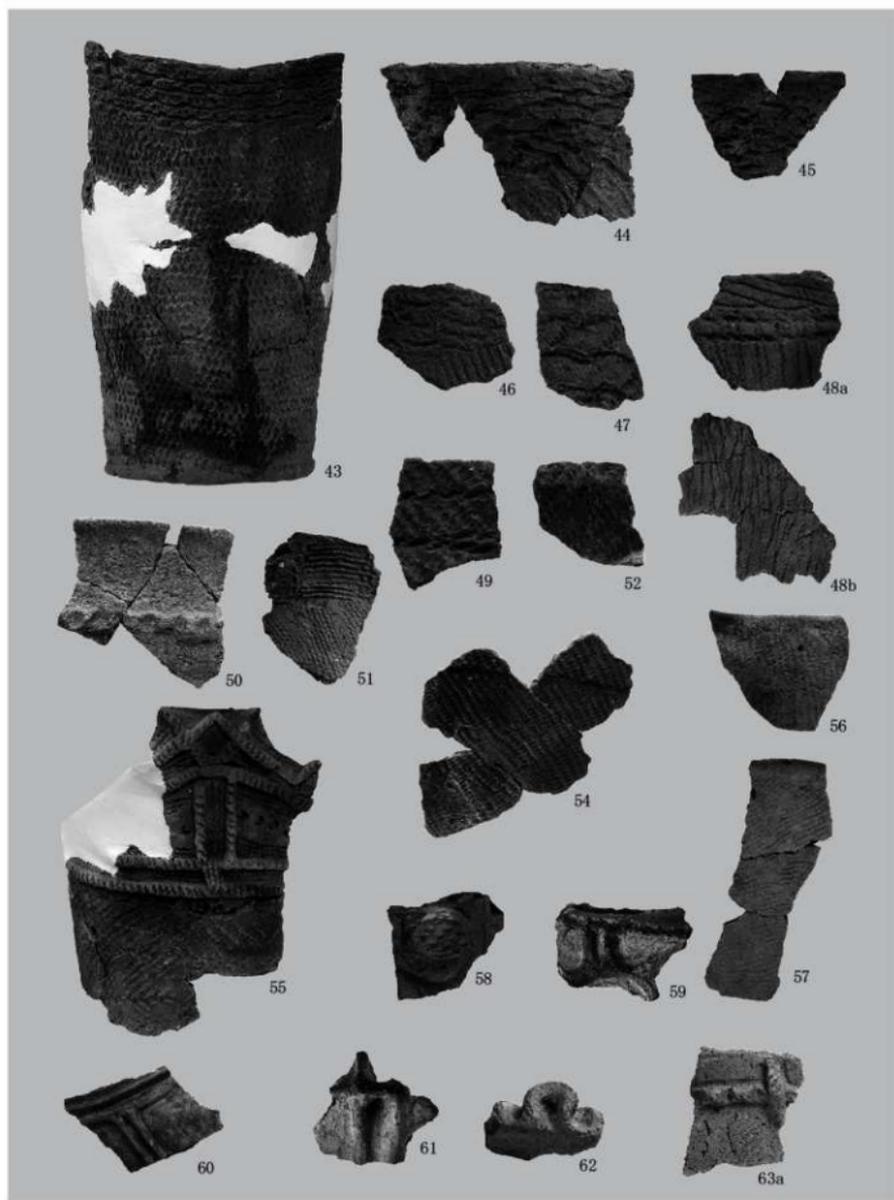
图版74



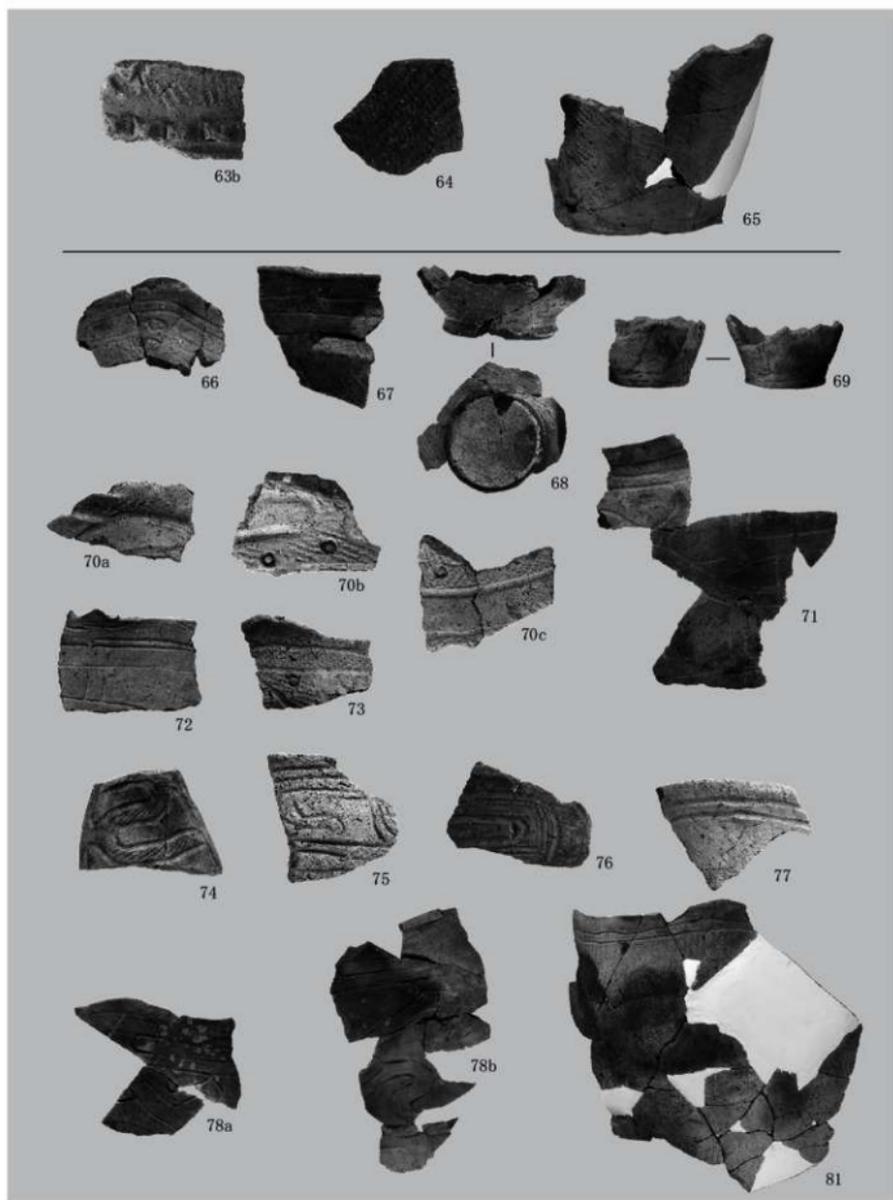
图版75



图版76



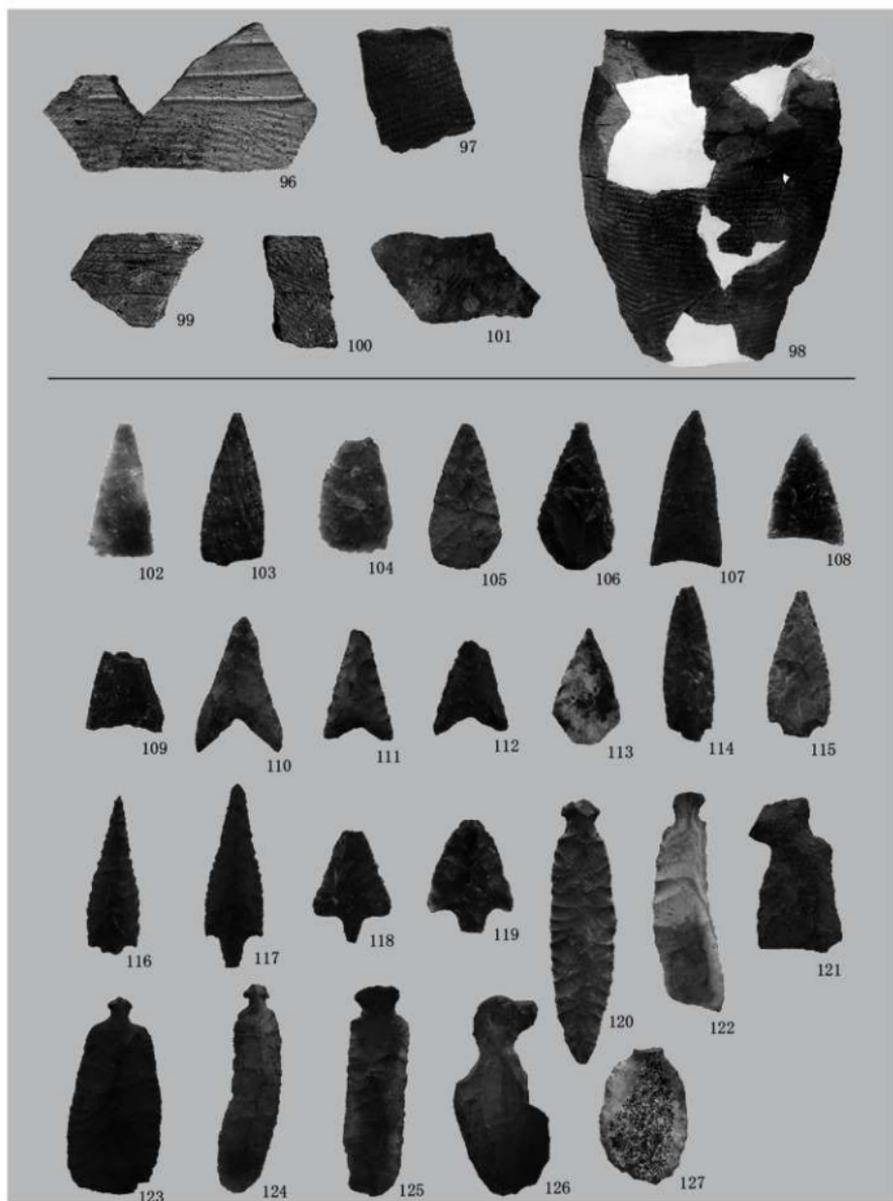
图版77



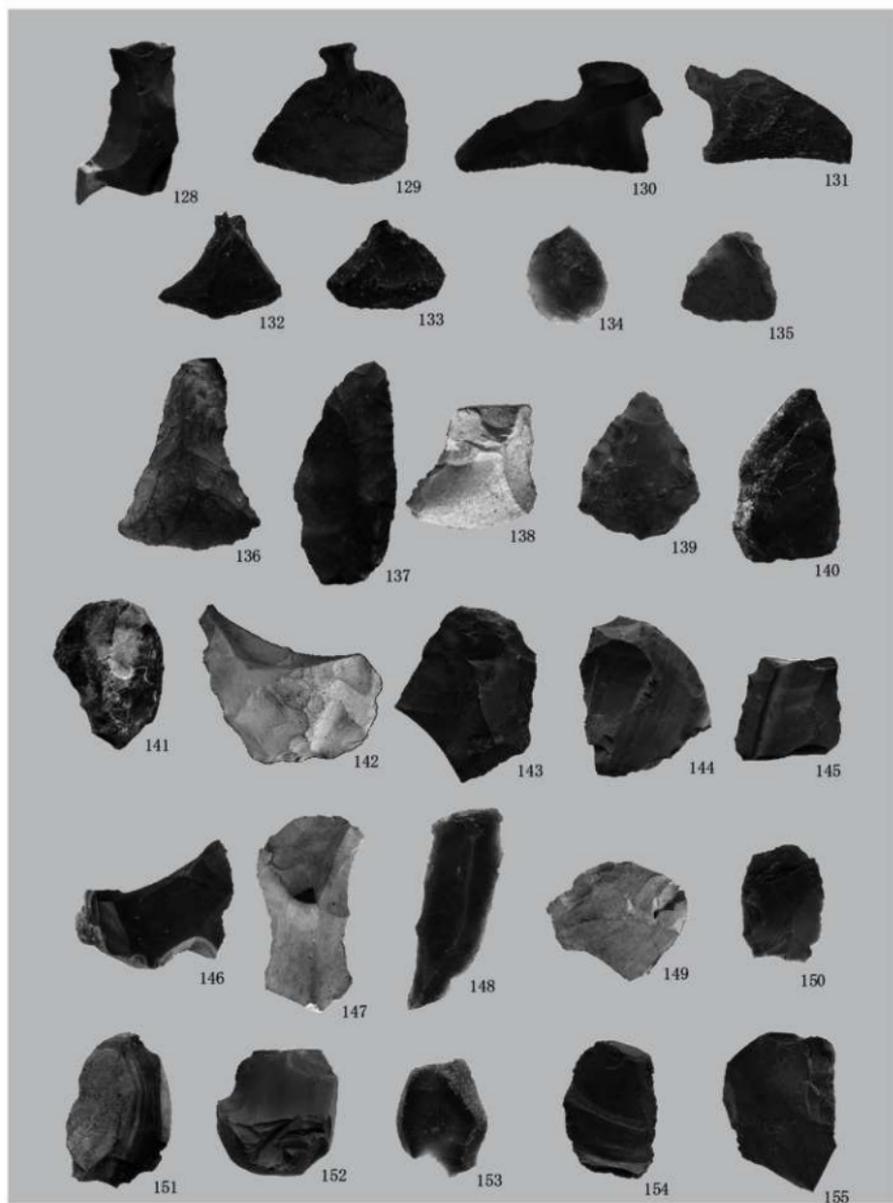
图版78



图版79



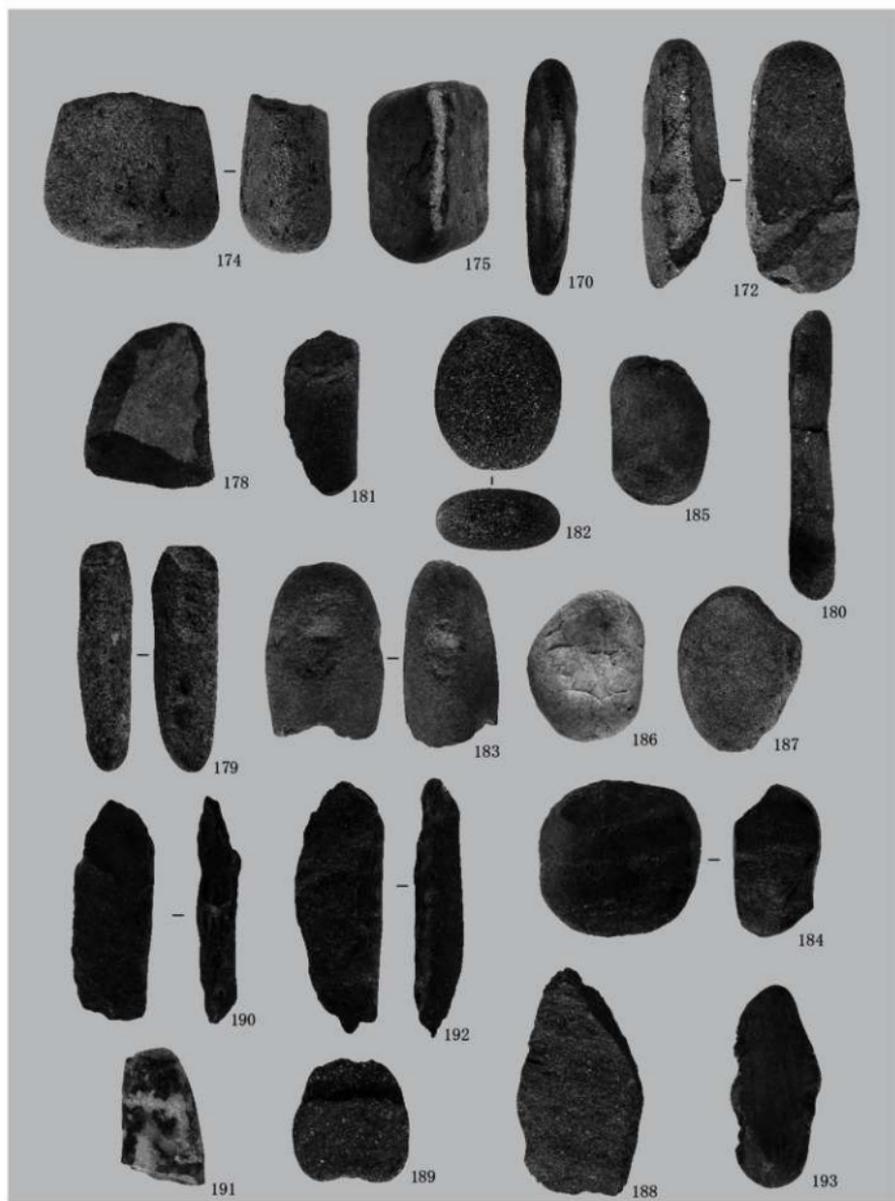
图版80



图版81



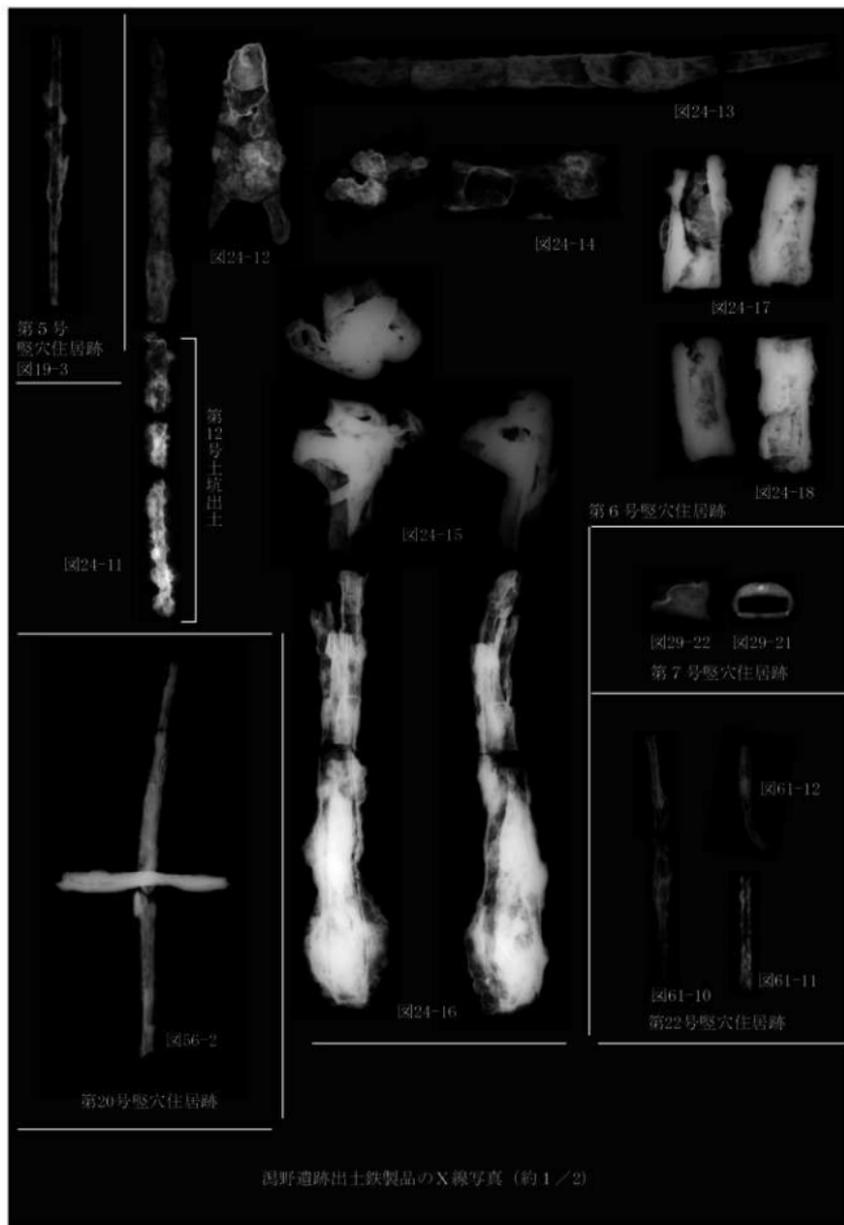
图版82



图版83



圖版84



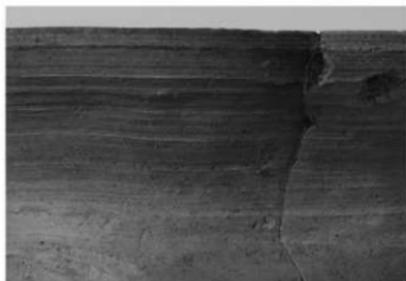
図版85



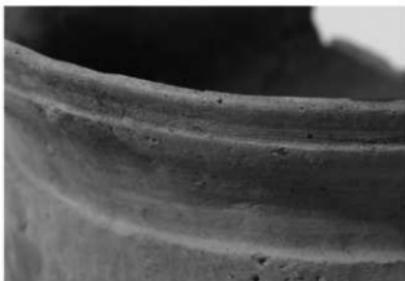
口縁部の横走沈線文 (SI14 図47-9)



頸部の横走沈線文 (SI14 図47-12)



細かい単位の頸部ヨコナデ (SI14 図46-7)



口縁部凹線状の段 (SI15 図49-1)



細かいハケメ (SI1 図5-19)



粗いハケメ (SI13 図42-4)



条の広いハケメ (SI22 図61-7)



ハケメ→ミガキ (SI14 図42-4)



ケズリ→ミガキ (SI17 図28-1)



ミガキ (SI15 図49-1)

図版86

## 報告書抄録

ふりがな	かたのいせき							
書名	洞野遺跡							
副書名	八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第412集							
編著者名	茅野嘉雄 岡本 洋 斉藤慶史							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城市天田内152-15 TEL 017-788-5701 Fax 017-788-5702							
発行期間	青森県教育委員会							
発行年月日	西暦2006年3月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		旧日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
洞野遺跡	八戸市 大字是川 字洞野地内	02203	03242	40°	141°	20040420 ～ 20041020	11,500㎡	八戸南環状 道路建設に 伴う遺跡発 掘調査
				28'	29'			
				33"	29"			
				日本測地系2000 (JGD2000)		北緯		
				40°	141°			
				28'	29'			
				43"	17"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
洞野遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居1軒 土坑1基		縄文土器 (吹沢式、早稲田6類、円筒下層式、円筒上層式、最花式、十腰内1式、大洞式)・石器・土製品・石製品		縄文時代早期中葉の吹沢式土器に、関東地方の子母口式の要素が加わった土器が第9号竪穴住居跡から出土しており、両者の関係を知る上で重要な資料となる。	
		早期中葉 前期初頭以前	焼土遺構1基 石器埋納遺構1基 集石遺構1基					
		中期後半 後期前葉 後期	竪穴住居1軒 土坑2基 竪穴住居3軒 土坑5基 土坑9基					
	散布地	細別時期不明	土坑10基 焼土遺構3基				奈良時代の第7号竪穴住居跡の堆積土中から銅製の銚帯金具が出土した。第15号竪穴住居跡出土の土師器坏底面には「#」の刻書がみられる。	
		中期前半 期			弥生土器(砂沢式ほか)			
	散布地	弥生時代						
集落跡	奈良時代	平安時代	竪穴住居11軒 竪穴遺構2基 土坑2基		土師器・須恵器・磁石・軽石製品・鉄製品・銅製銚帯金具・土製品・木器・炭化種子・錢貨		平安時代の焼失家屋(第6号竪穴住居跡)から多量の住居構集材とともに、木製品やさまざまな種類の炭化種子が出土した。	
		平安時代	竪穴住居跡7軒 竪穴遺構3基 土坑2基 掘立柱建物跡1棟					
	時期不明	竪穴遺構2基 土坑8基 掘立柱建物跡6棟 道路跡2条						
散布地	江戸時代～近代			陶磁器				
要約	<p>新田川左岸の丘陵斜面に立地する本遺跡は、縄文時代早期から近代にかけての複合遺跡で、縄文時代早期中葉・中期後半・後期前葉・奈良時代・平安時代と断続的に集落が営まれている。縄文時代の集落跡は小規模であるが、早期中葉の第9号竪穴住居跡からは子母口式の要素が加わった吹沢式土器が出土しており、編年研究の一助となる良好な資料が得られた。古代には奈良時代前半(7世紀末～8世紀前半)と、平安時代半ば(9世紀後半～10世紀前半)の2時期の遺構がみられ、集落の消長は八戸地域全体の集落数の増減と連動している。奈良時代の竪穴住居跡からは良好な一括資料が得られたほか、第7号竪穴住居跡からは銅製銚帯金具が出土している。平安時代の集落は、奈良時代の集落より斜面下方に営まれており、第6号竪穴住居跡からは多量の炭化材や炭化種子の出土をみた。</p>							

---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第412集

# 潟 野 遺 跡

－八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日 2006年3月29日  
発 行 青森県教育委員会  
〒030-8540 青森市新町二丁目3-1  
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター  
〒038-0042 青森市新城天田内152-15  
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702  
印 刷 株式会社 誠 工 社  
〒030-0113 青森市第二問屋町三丁目3-18  
TEL 017-729-1611 FAX 017-729-1188

---

第11節 八戸市潟野遺跡出土土鍔帯金具の鉛同位体比測定結果

削除  
古田生物研究所、国立歴史民俗博物館 齋藤 務

1. はじめに

八戸市潟野遺跡から出土した青銅製の鍔帯金具について、鉛同位体比測定を行った。

2. 分析方法

資料表面から鍔を採取し分析用資料とした。資料から、高周波加熱分離法で鉛を単離して硝酸溶液とし、鉛200ng相当量の試料溶液を分取して、リン酸・シリカゲルとともにレニウム・シングル・フィラメント上に塗布した。表面電離型質量分析装置 (Finnigan MAT 262) を用いて、フィラメント温度1200℃で鉛同位体比を測定した。

3. 分析結果

表1に分析結果を示した。馬淵・平尾が弥生時代から平安時代までの多くの青銅器についてデータを蓄積した結果、その鉛同位体比の変遷は下記のようにグループ分けできることがわかっている (馬淵・平尾, 1982, 1987)。ここでも、これに準じてデータの表示および解析を行った。

表1 分析結果

資料名	分析番号	<sup>207</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb	<sup>208</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb	<sup>208</sup> Pb/ <sup>207</sup> Pb	<sup>207</sup> Pb/ <sup>208</sup> Pb	<sup>208</sup> Pb/ <sup>207</sup> Pb	出土遺構
鍔帯金具	B7201	0.8476	2.0926	18.436	15.627	38.579	04 カタノ SI-7 4b 層 (I区)

なお測定結果は<sup>207</sup>Pb/<sup>206</sup>Pb比と<sup>208</sup>Pb/<sup>206</sup>Pb比の関係 (A式図) で表示した。

図1は測定結果を、①記の領域範囲のうち、E、J、Kとともに表示したものである。

測定値は領域Jの中にあり日本産の原料であることを示している。またこれは皇朝十二銭など奈良～平安時代の青銅製品に頻出する値であり、齋藤ほか (2002) が設定した「グループI」(図1)の範囲に入っている。供給地として山口県の長登鉱山や蔵目喜鉱山が想定されている。

- W: 弥生時代に得られた前漢鐵が示す数値の領域。弥生時代の国産青銅器の多くがここに入る。
- E: 後漢・三國時代の鉛鐵礦が示す数値の領域。古墳出土の青銅器の大部分はここに入る。
- J: 日本産の鉛鐵石の領域。日本産鉛は現在までのところ、後漢時代以降の資料にしか見出されていない。
- K: 多羅羅文鏡や細形銅鏡など、弥生時代に得られた朝鮮半島系遺物が位置するライン。

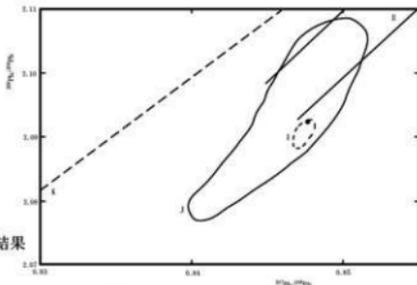


図1 潟野遺跡出土土鍔帯金具の鉛同位体比測定結果

4. まとめ

八戸市潟野遺跡出土青銅製鍔帯金具について鉛同位体比を測定した結果、日本産の原料が使用されており、長登鉱山・蔵目喜鉱山が供給地として想定されている。古代の青銅製品に頻出する数値を示した。

参考文献

齋藤 務、高橋照彦、西川裕一 (2002)、「古代銭貨に関する理化学研究—「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析」、FIMES Discussion Paper No.2002-J-30。  
馬淵久夫、平尾良光 (1982)、「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」、『考古学雑誌』68 (1)。  
馬淵久夫、平尾良光 (1987)、「東アジア鉛鐵石の鉛同位体比—青銅器との関連を中心に—」、『考古学雑誌』73 (2)。

## 第11節 八戸市潟野遺跡出土土鍔帯金具の鉛同位体比測定結果

国立歴史民俗博物館 齋藤 努

### 1. はじめに

八戸市潟野遺跡から出土した青銅製の鍔帯金具について、鉛同位体比測定を行った。

### 2. 分析方法

資料表面から鍔を採取し分析用試料とした。試料から、高周波加熱分離法で鉛を単離して希硝酸溶液とし、鉛200ng相当量の試料溶液を分取して、リン酸・シリカゲルとともにレニウム・シングル・フィラメント上に塗布した。表面電離型質量分析装置 (Finnigan MAT 262) を用いて、フィラメント温度1200℃で鉛同位体比を測定した。

### 3. 分析結果

表1に分析結果を示した。馬淵・平尾が弥生時代から平安時代までの多くの青銅器についてデータを蓄積した結果、その鉛同位体比の変遷は下記のようにグループ分けできることがわかっている (馬淵・平尾, 1982, 1987)。ここでも、これに準じてデータの表示および解析を行った。

表1 分析結果

資料名	分析番号	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{209}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$	出土遺構
鍔帯金具	B7201	0.8476	2.0926	18.436	15.627	38.579	04 カタノ SI-7 4b 層 (I区)

なお測定結果は $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 比と $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 比の関係 (A式図) で表示した。

図1は測定結果を、下記の領域範囲のうち、E、J、Kとともに表示したものである。

測定値は領域Jの中にあり日本産の原料であることを示している。またこれは皇朝十二銭など奈良～平安時代の青銅製品に頻出する値であり、齋藤ほか (2002) が設定した「グループI」(図1)の範囲に入っている。供給地として山口県の長登鉱山や蔵目喜鉱山が想定されている。

- W: 弥生時代に得られた前漢鐵が示す数値の領域。弥生時代の国産青銅器の多くがここに入る。
- E: 後漢・三國時代の鉛鐵礦が示す数値の領域。古墳出土の青銅鑄の大部分はここに入る。
- J: 日本産の鉛鉱石の領域。日本産鉛は現在までのところ、飛鳥時代以降の資料にしか見出されていない。
- K: 多羅羅文鏡や細形銅鏡など、弥生時代に得られた朝鮮半島系遺物が位置するライン。

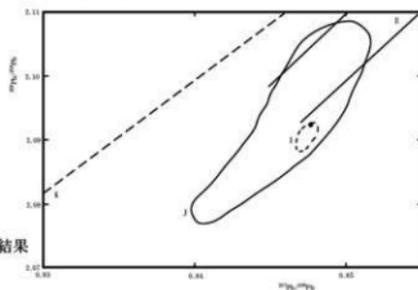


図1 潟野遺跡出土土鍔帯金具の鉛同位体比測定結果

### 4. まとめ

八戸市潟野遺跡出土青銅製鍔帯金具について鉛同位体比を測定した結果、日本産の原料が使用されており、長登鉱山・蔵目喜鉱山が供給地として想定されている。古代の青銅製品に頻出する数値を示した。

#### 参考文献

- 齋藤努、高橋照彦、西川裕一 (2002)、「古代銭貨に関する理化学研究—「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析」、FIMES Discussion Paper No.2002-J-30.
- 馬淵久夫、平尾良光 (1982)、「鉛同位体比からみた銅鑄の原料」、『考古学雑誌』68 (1).
- 馬淵久夫、平尾良光 (1987)、「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比—青銅器との関連を中心に—」、『考古学雑誌』73 (2).